

一、重慶 U・P 新聞電報放送 (二十日)

(臺灣總督府交通局遞信部聴取)

支那側情報によると河南省南部に侵入せる日本軍は棗陽方面に退却せり、尙棗陽の運命は目下不明なり。又本日入手せる別報によれば支那軍が湖北省中部殊に漢口宜昌公路や荆山安隆公路沿道で作戦奏效し日本軍の背後を脅かすに至つた結果日本軍は棗陽方面に退却せり。又日支兩軍砲兵は昨年二月以來久し振りで風陵渡潼關兩地から黄河を隔て二日に亘つて砲彈の應酬を行つたが就中日本側の砲撃熾烈を極めた。然れども支那側では日本軍に黄河渡河の意なきを觀破して居る。更に別電の傳へる所によると最近安慶の日本警備軍は支那遊撃隊に不意を衝かれ戦死傷千餘を出した他彈藥庫二棟を焼かれたり飛行機二臺を壊されたりした他傀儡政府廳舎も潰された。

145
一、重慶には家を失つた人が澤山居るがその中老若男女合せて四百人計りが國立救恤委員會から資金を得て日本軍の空爆の憂なき生活の本據を築かんとして居る。この野營所は戦線の背後によく見受ける難民の野營所と等しく、あの五月十四日の大空爆で一晩の中に出來上

つた野營所である。數百年前からの古寺の壁の蔭には銅製佛像の物柔かい眼差しを浴びて難民の女達が一日中縫物や編物に勤み野外では屈強な男達が鋸や槌の爽音を絶えず響かせながら附近に寮舎の建設を急いで居り、その又傍では新生活の指揮者達が忙しきうに、やかな工場の設計をやつて居る。之は日本の空爆に手荒く打ちのめされた難民等の工具や機械を備へんとする工場だ。役人は之を難民村に迄成長させんと考へて難民一人々々には食費として一日十五仙を與へ料理術を仕込み四六時中豊富な米野菜を供給し時には肉類をも供給する。食物が減茶苦茶になると自然病氣も増すので平生から衛生に留意し且數名の醫者を配屬せしめてある。だから此處の難民は家を失ひ家族と別れた人ばかりだが野營所内は何處でも愉快な気分が漂つて居る。指導者達は二つの理由を擧げて之を説明する。即ち(一)皆が何か仕事を持つて居て政府のお蔭に頼つて生き様とは考へて居ない。(二)將來日本軍の空爆の恐れは比較的少い。といふのだ。此の野營所内で最も明るい圖は小供の群だ。彼等の多くは嘗ては路傍に捨てられて居た孤兒か又は親達を助けて激しく労働して居た少年だつた。新生活掛りはこの小供を收容する爲假の學校を設けて居る。少年達は朝の六時から夜の九時迄絶えず嚴格な訓練に服する。即ちその日の日課の勉強が三時間、愛國者たるべくポイスカウトやガールスカウトとしての動作を行ふ事數時間の後、各自の得意とする繪彫彫刻編物の様な勉強をやる。

内閣情報部五・二四

情報第七號

◎汪精衛行動に關する中央社報道

—同盟來電—不發表

香港二十四日發同盟

二十四日當地支那紙は孰れも汪精衛の行動に關する左の内容の中央社電を大きく掲げてゐる上海よりの確報によれば汪精衛は日本の影佐大佐等が軍艦で海防迄行つて連出し、去る五日イタリー汽船コンテロツソ號で香港經由上海へ到着しブロードウエー・マンションへ滞在してゐたが、近く高宗武と飛行機で福岡經由東京へ行き、平沼首相と會ひ後陛下に謁を賜はる豫定である。なほ日本政府は既に平沼・汪秘密協定を批准した。なほ別の中央社電は汪が十五日北京に飛び、喜多中將と會見したと報じてゐる。